新撰陸奥風土記　拾

内閣文庫
和書
類
三六五〇二號
一〇冊
二二架
毛四函

地
三
七

共十本

内閣文庫
番號 和 36502
冊數 10（10）
函號 174 288

国立公文書館
National Archives of Japan

新撰陸奥風土記

十

日本政府圖書

新撰陸奥風土記巻之十目録

軍旅
奇變
雜

国立公文書館
National Archives of Japan

新撰陸奥風土記巻之十

仙臺　保田光則撰

軍旅

一景行天皇四十年東夷多く叛きて辺境騒動せ
天皇日本武尊を大将として征伐せしめ給ふ
日本武尊は上総より轉して陸奥國へ入玉ふ時大鏡
を御船にかけ海つ路より葦の浦に廻り横て玉
の浦に渡りて蝦夷の境に至り給ふに蝦夷の賊首
嶋津神國津神等竹の水門に屯して拒まんとし
けれど遥に御舟を見て其威勢に怖れて弓矢を伏

て降参す故に其罪を免して師を導かしめて行る
に従ひしめ常陸をへて甲斐信濃を尾張にかへり
給へり

一同五十六年御諸別王に勅してのたまはく汝か父
ときに御諸別王天皇の命を承則行て東国を
治め給ふ時に蝦夷騒動して民を掠めけるによりて兵
を挙て撃給ふ時に蝦夷の首帥足振辺大羽振
辺遠津闇男辺等降参して頓首て地を献る
よりて降る者をゆるし服せさる者を誅し玉ふ是以
東国久しく事なかりき　紀

一仁徳天皇五十五年蝦夷叛く田道をつかはして撃
しめ給ふに却て蝦夷に敗られて伊峙の水門に死す　詳に
古墓の所に挙

一欽明天皇十年蝦夷数千辺境に寇す是により
て其魁帥綾糟等（魁帥大者人也）を召て詔してのたまはく蝦
夷は大足彦天皇（景行天皇）の御世殺すへきものは斬、原すへき
ものは赦しまふ今朕彼前例に遵て元悪を誅
せんとすと、爰に綾糟等懼恐ひて泊瀬（はつせ）の中流に下
りて三諸山に向ひ水を口にそゝきて盟てまうさく
臣等蝦夷自今以後子々孫々清く明かなる心

を用ゐることに来へとすらん臣等か盟ふにたかふ
者あらハ天地諸神及天皇の霊臣の種を絶滅
しまゐらせんとちかひき

一 舒明天皇九年二月亥大星東より西に流るゝ音有
雷に似たり 三月癸日蝕ありし此年蝦夷叛して朝
せさるによりて大仁上毛野君形名を将軍として撃
たしむ 然るに却て蝦夷か為に敗られて塁に
入逃けて賊に圍まる 時に日暮垣を踰て逃んとす
形名の妻歎して曰 慷哉蝦夷に殺されんとす 夫
を諫めて曰 汝の祖等（おやたち）蒼海を渡り万里を跨へ
をうちたひらけ威武をもて後葉に伝へたりき
海外に其祖の名を屈して必後世嗤はれんと則
自ら酒を強ひてまつ夫に飲しめ親ら夫の剣を佩十の
弓を張女人数十に弦を鳴さしむ 既にして夫更に起
仗（つはもの）を取て進む 蝦夷軍衆多しとおもひて稍引
退く 是に於て散卒更に聚て軍を振ふ 其上て
蝦夷を撃て大に敗り悉く虜とす 紀

一 斉明天皇四年 阿倍臣名を闕く船師一百八十艘
を率て蝦夷を伐しむ 蝦夷に齶田渟代二郡の
蝦夷望怖て降をこふ 紀

一同五年二月阿倍臣をして船師一百八十艘をひきゐて蝦夷を伐たしめ給ふ至肉入籠問菟の蝦夷膽鹿嶋菟穗名二人進みて曰後方羊蹄を以て政所とすへしと膽鹿嶋等の語に随ひ遂に郡領を置て帰る　紀

一和銅二年奥越の蝦夷野心ありて屡良民を害するに依て巨勢朝臣麻呂を陸奥鎮東将軍とし佐伯宿祢石湯を征越後蝦夷将軍とし節刀を授給ふ

一元正天皇養老四年陸奥蝦夷叛を起し按察使上毛野朝臣廣人を殺せしかは播磨の按察使多治比真人縣守を持節征夷将軍とし（是征夷将軍の始也）下毛野朝臣石代を副将軍とし阿倍朝臣駿河を持節鎮狄将軍とし節刀を授給ふ　續紀

一聖武天皇神龜元年陸奥海路蝦夷反し大掾従六位上佐伯宿祢児屋麻呂を殺せしかは宇合を持節大将軍とし高橋朝臣安麻呂を副将軍とし蝦夷を征伐せしめ給ふ

一寶龜五年陸奥海道蝦夷乱を起し桃生城を侵せしに按察将軍大伴宿祢駿河麻呂に勅して

年久しく明年復蝦賊蜂起より秋田へ渉りて田疇荒
廃すと聞して当年の課役田租を復し給ふ

一同八年志波村賊起る出羽の軍伐て退く

一同十一年陸奥上地郡大領伊治呰麻呂反しく
按察使紀広純を殺しけりて中納言藤原継
縄を征東大使とし大伴益立紀古佐美を副使
とし安倍家麻呂を出羽の鎮狄将軍として夷
賊を征伐せしめ給ふ時に賊徒大に起りて戦勢
を振ひ路を遮りて戦に官軍進まずして数月を過
されけれは秋九月再藤原小黒麻呂以持節征
東大使として奥州へ下向せしめ給ふ其後も賊勢強く
して将軍を遣はさる天応元年九月漸く平定し
各帰京しける大伴益立は数征討をまかせたり軍功
なきをもて官位を奪はれけり

一五十代桓武天皇延暦七年陸奥蝦夷蜂起しけるより
て参議紀古佐美を征東大将軍に拝し節刀
を賜ふ明る八年四月古佐美兵を率て奥州に
到る六月古佐美及副将軍広成等左中軍の将
池田真枚前軍の将安倍墨縄等夷賊と衣川
の合戦に官軍敗績しける田の道安倍津

の壮麻呂大伴五百継等戦死し其餘進撃し或
ハ河ニ溺れて死せる者千餘人傷を被る者二千人
賊ハ其首を獲る事纔八十九級将軍ハ将略ニ疎して死
を免れて京へ帰る天皇古佐美の墨縄ニ依り敗軍の
罪を勘問し古佐美の罪を免し真牧墨縄等の
官職を解免せらる

一同十年七月大伴弟麻呂を征夷大使とし百済王
俊哲田村麻呂を副使として東夷を伐しめらる
夷賊悉平治す

一同廿年東夷叛きをうちて二月田村麻呂代て征夷大将
軍として節刀を賜ふ廿一年田村麻呂をして胆沢の
城を造らしめ給ふ夷大墓公阿弖利為盤具公母礼
種類五百餘を率ひて降る八月大墓公盤具公
二人を河内国椙（文作植）山にて斬せらる

一嵯峨天皇弘仁二年陸奥の蝦夷そむきしかハ
征夷将軍文屋綿麻呂をしてうたしめ給
ふ　日本紀略

一後冷泉院永承六年陸奥国俘囚の酋長安
倍頼時奥六郡を領し威名大ニ振ふ人民を劫
略し貢賦を輸さすして陸奥守藤原登任出羽秋田

城介平重成𛂞を発して頼時を攻、諸部俘囚を
率て大に鬼切部に戦ふ、官軍敗る、是に於て朝廷
源頼義朝臣を鎮守府将軍に拝し、東征せしめ
給ふ、頼時懼れて降る、後頼義任終て京へ帰らん
とする時、頼時の長子貞任法を犯すること有、頼義
怒て罪せんとす、頼時叛して衣河城に拠る
頼義怒りて兵を進て城を囲み攻戦すること数回
天喜五年九月頼時流矢に中りて死す、凡七年
而して諸子伏せす、貞任敗卒を集て河崎の城を
守る、康平五年七月頼義の将卒を発して羽州仙北
の豪将清原武則子姪及一万の兵をひきゐて来府に
来る、九月貞任等八千をひきゐて来府を攻て敗績す
官軍追撃して衣河城を抜、貞任走りて鳥海の
城に入、官軍進て城下に至る、貞任戦ひ走して
厨川の城に至る、官軍火攻にして城を焼、貞任
自ら奮戦、敵を殺す事数百人、家衆大小集りて降を
乞て刺て殺す、永承六年より凡十二年にして
奥州平らきぬ

一安倍貞任
古今著聞集曰伊予守源頼義朝臣貞任宗任

軍を攻て陸奥に十二年　頼義秋を送りむかへ給ふ
をも立て秋田城に移りけるに雪ふかくして兵に降て寒の
おのこどものよろひ皆白妙になりけるに　九月六日　衣河の
館峯高く川有けれは楯をつらねて曲目にかたく
筏を組て攻戦ふに貞任ら堪すしてつひに城
の後よりのかれけるを一男八幡太郎義家衣
河に追立攻ふせきてまさに首をとらんとするに
哉たてしはし引かへせ物いはんといはれけれは貞任見
かへりたりけり
衣のたてはほころひにけり

といひけれは貞任くつはみをやすらへしころをふり
むけて
としをへしいとのみたれのくるしさに
とつけたりけるに附義家はけたる箭をさし
はつして帰りにけりさはかりの戦の中にやさし
かりける事なり
一　同宗任
太平記抄曰　宗任奥州よりのほりけるに殿上人達
吾妻の蝦夷なれはさそいかならん試みんとて梅
花一枝を宗任にさしつけてこれはいかにといへるとへは

ゝ家あれ梅の花をみなみるまことに太宰人は
しらすりけらん
光則思へらく此君等大君にまゐらするは無罪にして
よく御かへしあひけれは能唐人の口を縫ひ謀りて
もしたくはなしかたき人こそ名たたる新義叛臣の
智勇なくしてかく十二年までつゝきけるゆへ滅ひしはしめ
これも源氏にても聊心あるもの慎みて進みおし
雲の上人のおもむきとこゝろみまよひけるに智勇
といひけるにいまや穀貝とよびあはせるつましいふと
悪也と云へし

一 後三條院延久三年陸奥夷賊蜂起して陸奥守
頼俊勅を奉して討平らく

一 堀河院寛治五年陸奥の清原武則の子武衡
及家衡謀叛を起して先つ源義家叛臣清原将
将軍と称して下向して武貞の猶子藤原清衡出て
郎従と成武衡家衡年日清衡と不好して敵て
従はす仙北金沢の城に拠て叛くを義家兄義光遂
武衡家衡を誅し清衡を留置して奥一州を
坂東の武士皆源氏の私属と称する此に始る

一 文治四年藤原泰衡の泰衡へ義経を召進むへき由仰さける

一 宣旨を蒙り并院宣を下さる泰衡始ハ推辞せし
かと明る五年閏四月晦日遂に数百騎の兵を以て
衣河の城を囲ミ其首を取て鎌倉へ贈る

一 同五年頼朝私に兵を発して泰衡を伐泰衡軍
敗て糟部郡に入て比内郡に至り其臣河田次郎の
贄の柵へ入九月三日河田其主を弑して首を頼
朝に献ず頼朝河田を誅す頼朝葛西清重を

一 留主として鎌倉へ帰る此年泰衡の旧臣大河次郎
兼任君の讐を復さんとして義兵を挙凡七千

一 余人葛西清重兵寡して征する事あたハすして十二月
廿三日鎌倉に告

一 建久元年正月兼任秋田大方へ出志加の渡に於て
堅氷を踏て渡る氷忽解て溺死する者五千余
人鎌倉より千葉常胤を東海道の大将とし
比企藤四郎能員を東山道の大将として兼任
を伐しむ二月十二日征東使及国兵岩井郡平泉
を出て泉田に向ふ兼任是を聞て一万の兵を
率て平泉に退く千葉新介兼任の兵と栗原一
迫に戦ふ兼任敗走す兵五百余騎を収めて再
来を平泉に張鎌倉の軍進て衣川へ入兼任再

殺害して水上河を越外か濱糟粕の中に逃る一ヶ年
山有りたまひあの様とふ兼任にしに逃を従る上
総あ司小野親永来りて山城を抜兼任出奔兼山
千福山本にてまた栗原本吉本に潜て逃る三
月十日土人兼任錦の脛巾を着金鉀刀を佩し
ときんであめやしにて樵夫数十人奉を圍て斧を以撲
殺しぬ此時本に首を鎌倉へ献る報韓雖不
成天地皆震動す惜かな智ありて腹衷(フクカウ)いさして
樵夫の為に殺さるゝ事

一 土御門院正治二年源頼家弟武田四郎をして
芝田次郎を伐しむ

一 後深草院正嘉二年秋陸奥出羽諸郡夜討強盗
蜂起多し鎌倉より此を護職に合して征せしむ

一 後醍醐天皇元亨二年夷陸奥人安藤季長
夷を起して族人と共戦ふ北條高時兵を差して
討しめるをかゝまりき　大日本史

一 同延元元年五月足利尊氏大軍を以て京へ入
て皇賊を避て叡山へ幸しおふ同二年結城府
将軍顕家は義良親王を奉し大軍をおて奥
州を发し鎌倉の軍ふ克んて鎌倉を取同しく

三年正月八日顕家卿及新田義興鎌倉を攻落して
京師に赴き従兵凡そ五十万南都に至る尊氏
桃井直常をして攻しむ顕家卿敗績五月高
師直と戦ふ又再敗績し安倍野に戦死して薨す二十一歳

奇變

一推古天皇三十五年二月陸奥國狢（むじな）あり人に化
してうたうたふ 紀

一聖武天皇天平十四年正月陸奥國申さく
部下黒川郡より北十一郡赤き雪を雨（ふら）すること平
地二寸なりと申せし

一嵯峨天皇弘仁五年二月於陸奥國白雉を獲
たりき

一淳和天皇天長七年正月三日出羽地大に震ふ
其後陸奥出羽両国の國に疫癘流行夭死稍多し

一仁明天皇の承和四年四月十六日陸奥まうさく
玉造塞温泉石振動する事雷の如し　大日本史 廿五

一清和天皇の貞観十一年五月廿六日夜陸奥國地震
或海水暴溢死者千餘人天皇紀春枝を
遣し撫て民賑恤せしめ給ひ租調如く免し
めよと詔を下し給ひけりき　三代實録 巻十六

一同十五年三月陸奥國頻年登らさるによりて
賑給し玉ひき

一陽成院元慶二年五月陸奥國連理二株獲つと

一日本紀略に云醍醐天皇寛平九年陸奥國ま
うさく安積郡小座所の小児額の上に一つの角おひ
たるを角上亦一つの目ありき　史

一圓融院貞元元年正月二日陸奥不動穀倉二
十宇所焚ありき　史

一後堀河院寛喜二年十月陸奥國芝田郡石殞
て多く鳥獣を殺せり直一十餘里

一古骨山の巨骨
柴田郡大木林山の南よりて西南に跨るを古骨
山といふ昔洞を生せる時穿て巨人の朽骨を
地下に得たるに長一丈餘後人朽骨といふ志

一八十八代後深草天皇宝治二年五月十一日陸奥海（元文）
水紅如臙脂陸奥の留守鎌倉へ申て曰去九月十日
奥津軽の海濱に流れ寄る死人の如し故に古
来此をみる者三年を超えて必ことある有と希頼嗣
悦ばず　志

一衣川辨慶石
磐井郡衣川に辨慶石といふ石有き傳へいふ弁
慶此石上に死すと此石甚霊異ありとて
後花園天皇享徳の比京師に遷へ送られり　日件録

一陸奥國田村の郷の住人なる光任なにかしとかやいふを
のこ鷹をつかひけるが鳥をえずしてむなしく
帰りけるにあかぬまといふ所に鴛鴦一つがひゐたり
けるをくるりをもちて射たりけるにあやまたず
をとりにあたりてけりそのをしをやがてそこにて
とりかいて餌袋に入て家に帰り
ぬその次の夜の夢にいとなまめきたる女のちひ
さやかなる枕にきてさめざめとなきゐたりあや
しくて何人のかくはなくぞととひければきのふあかぬ
ぬまにてさせるあやまりも侍らぬに年比のをとこ
を殺し給へるかなしさに堪ずして参りてうれへ

まうすなり此堂ひさしくなりて口ゝ方もなきあとへ往ほし
きなりとて一堂の再營をとけんとかくれきり
けり
其堂ありしところは物哉あら泥の古池膚かくれ泥の淵ゆき
あいはなるしきに学ひ不とに中一日ありて後ゆきて
是かんりれを名代家に然ると然めとりのはしをかはし
て飛まで是はりりをとハまくまの出る先やるて影古を
起て出家しては此の刑部大輔仲能類に
の領に往かん付れる　古今著聞集

雑

一 材木岩
刈田郡渡瀬(ワタラセ)の東不動岩の西北小原村にあり
堺服大若村定義(ヂヤウギ)のあたりの近所にも有材木を
重ねたるに似たる岩ありけり

一 達谷窟(たつこくいはや)　或作田谷岩屋
磐井郡平泉の西南十餘里達谷村に在田村
麻呂大将四面の堂を岩窟の中に建毘沙門
百八躰を置しに今失て一尺餘の小像のみ
残りて慈覚作也東鑑云田村麻呂利仁等の

将軍綸命を奉し征夷の時賊王悪路王并赤
頭等塞を構へしの岩室也

一 音鳴穴

本吉郡気仙沼驛東細浦の東に在洞口西北に
向ふ井大きなる鐘乳石数本垂下に垂着て柱の
如し洞中常に水有ふよりて其の底へ落る音清
く音楽を聞か如し故に管絃窟とも云

一 大櫻森の大桜

大同年中に植しと云登米郡寺池の驛東
南三町計農家敷中に在

一 興の井沖石

宮城郡末の松山の側農家敷井の小池の中に在
奇石也俗おきの石といふ讃岐の沖の石とよめる
是也といつる沖に小あるまて此地延居の里なりく
おきのゐてゑをやくよりもとよみたる也故に
おきのゐ沖石といふを俗にハ思ひておきの石と云也

一 赤引の石

宮城郡留ヶ谷村手引観音の側に在一字洲の
組紐まても及兩輪奥州下向の時の歌
陸奥のお引の石ハ我恋ハしらぬかあふこ井やおぼろ

一 槐の大樹
名所の七湯村道に生ず本の圍三丈餘

一 あこやの松
名所郡十三塚村に生ず此松百年計以前より二樹有しが枝葉一樹と成り合せり女松にて樹の高さ五丈根五圍に餘る東西へ枝の垂る事凡十六間又南北へ横はる事十七間餘其丈餘にして四段に鬱る其形姿実に千載の古木也道祖神の社へ西にありて東南八丸里を隔る事實方朝臣當國下向の道にて是を目にとめ給ひし時此松をこそなりしとかや
の松とて聞えし由、附翁か家なる古き書を引て仍古屋の松ハ出羽の国にある事を載へ書る中にも猶只あこやとのみ記しけれは此所をあこやの松の名をもあこやの松といへ々ニ十三塚の名は街道の傍に塚十三有各塚上に松を栽中に十三佛の碑を建名

一 朱谷
東遊記巻五曰津軽の外か濱に一ツの館と云所有此所の北の方にあたり岩石海に突出せる事あり是を石崎の鼻といふ其所をこえて雅し

ゆりそ朱谷ある山に入る流石ある所より細き
谷川流れ出て海に落る此谷の土石皆朱色也
其の色いと赤くめれなる谷の影に映じて海
際に至るまで也されば此辺の海の小石も多く
朱色也此辺の海中の魚皆赤しと云岩にまで
石の朱は魚にまよりて海中の魚其成は石も朱
色なりける其情を推すに感せられける所也
余も此所を臨みしに谷川を伝ひ奥深く入りて
ところに朱砂多くし土を堀てこれに其色を見しあさ
やか也大なる朱石を取てまし少く種々に掬る

又石乾く時は朱色少まことに無類の色のごとし
此谷の人家には柵を設けて人の入る事を禁じけるゆへに
領主の益とせられしてる也しかし卯の年此鉄鍵を
外に濱にて甚だ此あたりは人種のまじわりしとかや
雑の人にて伐られき人も少けりと云又還る人なし
余の斯遊びしは僅に三年の後也しに柵も破れて
ゆる人もなく道路自由也しかし時節に来りしか
いかにも極上品の朱砂辰砂には及ばざれども人迹
稀なるはいまだその益なからんかし
此書を著したる橘南谿は文政十二年の頃に遊

せり越後七不思議の事を天明六年と記せり

一 蝦夷穴
刈田郡山村に在 洞穴五十二あり 上古蝦夷の
をりし所也とぞ

一 石神の石
桃生郡寺谷地村龍口山と云町針山の中に存す
立る一丈二尺周三丈五尺 錐を形ち恰人の坐する
か如し 土人云 能くハ是式の石神社なるかといへり

一 槻大樹
同郡明神濱に在 周七尋餘 泥埋御前の木といふ

一 蝦夷穴
志太郡次橋村鼎井沼の岸に岩窟穴二ツ在 其
口僅に身を入るゝ 中廣さ大抵一丈四方計 其中
四面を漆にて塗しもあり 昔蝦夷の居住し穴也とぞ

一 槻大樹
栗原郡花山村に在 周り三丈八尺計 木皮瀬聚
して瘤の如し 所人呼て千年瘤といふ

一 銀杏大樹
宮城郡仙臺東の町南二番民家の庭に在
傳ていふ 聖武天皇の御時植しといふ 既数多

下りて大さハ六七尺ニ廻りハ五六寸さもある乳の足
らさる婦人乳まれなるハ乳出るとて木の下へ小祠を建
四冠字考ニありの実のなるとつけしもの
こハ銀杏の実生へしといへるもあれなんかし

一 牡鹿松

牡鹿郡根岸村の山上ニ一本の古松有とて仙
臺府志畧ニ古しへ牝牡の鹿常ニ此ニ住つき
ある日ニを牝をと共ニ牡鹿死けるを所をやまぬ猿法
ひとなきたれハ牡鹿郷人あはれみ埋めて松を
植たる也松の下ニ石あり鹿石といふ遠つ郡なり牡鹿

と名付

一 石の梅

玉造郡大口村川渡の温泉と東湯との間百姓久兵衛
か宿のうら池のほとりニ在大きさ方丈計なる石のさけ
たる所より梅の木生ひ出たり花ハ白の八重
なり昔のハ枯くちたるを今つきたるなりといへり接をこゝ
の年へたる木とこそいひけれ一日昼明寺なる道國といふ
ものかけるもの見てニありて此梅を見て
陸奥の此こそ見ん梅の花咲は乃に石も襲えよ
とよみたりけるを此所ニ植付られたりけるを今ハ失ひ

めるとて此梅よ小石の梅とも石川の梅ともいふ

一　一本木の家

慶長年中の比なりしとか、茨城郡花渕浜村へ
治兵衛といふ人の心ある男にて鉤を垂るに先だち
て日和見とおもひけるに東海通ひ崎の如く浮び出る
物ありあやしと思ひなから近寄るにて鯨のよふな
まるなるらんと疑きのあなりけるにやかて船の映す
るに従ひたゝよひて寄るは母なる木の流れよりて
しるやと思ひかしと思ひて奴僕等に帆つなぎ引
つけさせと舟子どもよせて身もても手に漕よせて見るに

浮木にてありけるにかゝづきすゝる者の縁よ此みつれ
をつけさせて浮木のすゝらに結ひつけて船を陸
近くひきよせさせよりて浜中の者に酒など飲ませ陸へ
あけしとぞ木の太さ長さ廿八間余廻り二丈八尺五
寸と以て木性いまださだかならず厚朴（ほゝのき）に似たる木也
是によりて此樹一本をもて一屋を造りし家の
大きさ長さ八間横三間なり柱棟梁桁鴨居の類
いふに及ばず板戸障子の類まてことごとく大小と
なく換用ふるに用に足りて治兵衛は先ことより如く
良材を得るの徳ありて従ひて材を用ゆるの工匠

ことゞもなく移りてし此家今にいかし一のまゝなり
存たりしとを是まて久しけれバ板戸障子の類ハ
いかで破れたるを修理したる所もありさて何
者の所為か此木を削りて取て瘧病を煩へる者
後ちまいハ平愈すと云ひつたへさるによりて板戸障子
の類まて削りたる所ありし家主ら此を制すれ
とも盗みに削りとる者今におゐてもやまんで宜なる
かゝる希有の材紋目ともに輝きて妙なるものなるから
木の済木ましては必ず目出度の吉瑞に翻たるなる
無し此法を守より数代ならむゐるを此家の中にて

衰せる者なれ代々世事を譲りて後ていにかく
病死なとといふ子孫なく長寿なり近年甚破損に
及ふと雖なかなかにやかしくて修理しまいりしとなり名

一
瓢石（フクベイシ）
伊貝郡小坂村路の下或道の中にやまひて成り自
然とふくべの形をなせる石なり惜むへき近年上の
ものいきにふびれいかけられて下の大きなる所のみお
ほり長さ弐尺計を存す

一
思ふとも摺石
信夫郡瀬上河上山口村小倉寺のほとりにありて

石東西壹丈壹尺六寸南北六尺九寸七分地上ゟ高さ南の方ニ而高さ壹尺七寸北の方ニ而高さ六尺弐寸 福島城主堀田正虎卿元禄年中碑を石の傍ニ立

一 志だれ栗
宮城郡塩竈神社の玉垣の側ニあり

一 羽黒杉
志田郡松山郷千石村羽黒権現の社地ニあり鎌倉景政手づから植る所也といふ周り三丈弐尺

一 胡麻坂
遠田郡涌谷村ニあり坂の細石胡麻の如くニしてあまたあるとて名付く

一 貝殻坂
同胡麻坂と並びて十町計岸ニ貝殻あり又路傍岩井の泉ニあり中ニ細貝子数多あり皆春蝕として生きてあるよりて名付く

一 青麦村古桜
江刺郡松鞍といふ所ニあり郷人此花の咲を見て年の豊凶をしるといふ早年ニハ赤く咲き五穀不熟の年ハ白く咲るとぞ

一 野ゝ八景

塩松八景

塩竈浦舟　雄嶋旅雁　月見崎月

蕭寺暁鐘　籬嶋夕照　浮嶋翠松

海濱漁火　富山暮雪

宮城八景

宮城秋月　木下晩鐘　本荒夜雨

榴岡夕照　玉田落雁　青葉晴嵐

松浦遠帆　多賀暮雪

塩竈八景

塩竈暮烟　籬嶋斷雨　社頭賞春

法蓮臨潮　江郷春雪　前津泊舟

松浦秋月　壺碑懐古

松嶋八景

松嶋秋月　雄嶋夕照　梅浦早春

霞浦帰雁　瑞岩暁鐘　竹浦夜雨

塩竈暮烟　江縣残亡

同

梅浦春景　霞浦帰雁　市鄽漁家

雄嶋晩眺　塩竈暮烟　山寺晩鐘

竹浦夜雨　松嶋秋月

一自然の明玉

紫田郡大河原村宿に住居せる長井快安と云醫師の親父ある時ふとほとりを出行けるに小児とも数多集りて光る石の中に有ける物をとりまさに京都へまいりけるを留して小石を賽錢にかへけてをさむるを見あやしく思ひさりて何なるをとへハ此石ハ此ほとりにてひろひたるに中におとありて中に何か物ありて音する面白き石なりといひたるに不思議らしき物なれハ我もらはやと云けりてまよしと答て錢をとらせて我家にかへりて割

中なる物音やしけれハこまかなる石をはつり見るに中より小さき玉出たりこれを削りける時玉に少し瑕ありけれハ手をかへてこれを磨けれハ終に少しもなくて本の如くなりにけるとなん我か永元年三月ある中に語りける噂さなり快安の宿にいたりてその玉を見けるに昔ことなるにの無きに泣し下和か玉とも是にハ増りしとぞ思ふ珍しき形なる玉なりき是を玉と云ふに石ハ強く気しなる石の中よりかく出けるハ不思議にて玉と云たり是を知れるものも石の中にありたる物にして玉ありのまゝを磨もかくれなる物ならすや漢にても玉璞と云ひしハ器となるを

といへとも今なるは賢人以上の学はなくとも道を知るさ
るゝ如し人にも生知安行の聖人あれは玉にもかく珍
なるもして形体備りて光明のなるあれは此玉の如
きは実に以て稀なる物なれは玉にして聖人にたく
ひへき玉なるへし

一 霊蛇の白玉

我同藩の士岡崎某 勇太夫 名取郡早股村に住し
時蛇の玉を得られし時は文化七年十二月宿のそは
なりける明神堂の辺に蛇数多死してありけれは庭陰
まとなに寳蔵いてより以ての中にも有やとて見つるて見

なに少さき物の壱つあるを取出して見れは玉なりけるとそ
時物にあらすして世痴みなりけるに年を経て此物あるを
いえたりとそ我先の年早股村なるうちをさひ
ける折りて見けるにうつしく白き玉まて以と
うるはし此玉を蛇のもてるを他の蛇もうはん
として争ひあひあひて多く死ける様なるへし蒙
求中仲宜独歩といふに往に人を自謂く霊蛇の
珠を握るといへり又楚王の臣隨候蛇の病を療し
けるに夜光の玉を含みて恩に報ひし事なと
あり龍に之頷下に珠有とも以へは龍蛇の類は

玉ある物と見えたりけり

一 魚石

叢雅新妻順藏著 十二云磐井郡東山の山中にて石工石
を採る事ありしに石中に孔ありて水出中に一寸計
の鮒の如き魚ありしがはねけるに驚きて
取にけりとぞ又膽澤郡衣川の邊なる民家に六部
の宿をかりけるに軒下の石をみて金武歩に買んと
いふ主人驚きて惜しみて拾両にならば曰我南部に往
て帰る時に取て帰らんとて出ゆき後二月餘にし
て帰る石をとふに主人云庫中に置たり
の帰るを待たるに僧大に驚きて曰あやまちたり
主人に此石をとふに僧曰彼石ハ魚石といふもの也裏に
鯉に似たる魚二尾あり我まさに地を離れて突附
に庫中に置たれハ魚死すべしと一錢も
直へのなすといふに主人甚悦ばしき僧曰然らハ石を
破りて見るべし魚生てあらハ拾両に買んといふに即ち
斧をもて打破るに中に孔あり模形の如くにして
水あり黄ばみた鯉に似たる魚二尾ありて死せり
各四寸斗なりき

一 雀亀

同書曰本吉郡追波濱に十間餘の石島現ハれ
しかるよし又此ハ亀なりと二時許り経て海底に沈
ミしとそ舘崎権右衛門語りける蠵亀ハ大亀形如
山といふもの是なるへし

一 元龜（うミかめ）

又曰元龜（ウミカメ）ハ古来詳ならすとも本州の説あれとも蘭山も
知らさりしにや文政二年四月六日牡鹿郡遠嶋の内荒
田濱にて獲たる物真の元龜なりき大さ竪五尺餘
横四尺五六寸首ハ鼈に似て鼻嚪に似足ハ爪なし
背甲をふせたる如く腽腯として平かなり肌鮫
の如し背淡黒腹白色鵰甚多く領に斑あり
甲堅からすして鯨皮の如し油を煎して数斗
を得たりと云

一 鸚鵡坂

本吉郡気仙沼の宿より西南の方へ後に向け八
坂あるところを鸚鵡坂と唱ふ坂の七八分程ニ登り
たち北の山に向ひて呼ふ物呼ひ声ハ山にかへりて言
の如く答ふるやうなるよりて名付く

一 千貫石（センクワンイシ）

同郡気仙沼音鳴究の上なる崎の上一町ほとにある

錢を緡（ゼニサシ）につらぬきたるさまに見ゆる所にある石なり
よりて名つけたるも

一 人取（ヒトトリ）石（イシ）
會津盤梯山にあり書言字考乾坤門盤梯山の
註云此地毒石あり俗呼て人取石といふ是則按
に下野國那須野原の殺生石の類なるべし

明治十年十一月以 縣本謄寫修史館地誌掛

国立公文書館
National Archives of Japan